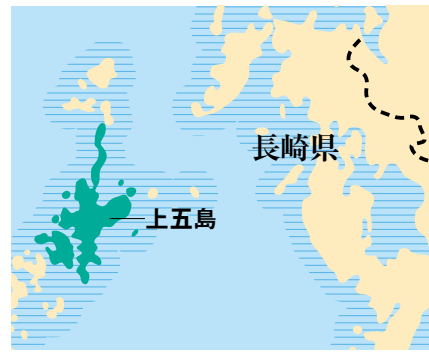




ダイビングショップを訪問して島へのリポーターを獲得する秘訣を取材する生徒たち。



五島列島北部の南松浦郡新上五島町は通称「上五島」と呼ばれ、中五島高校は最も大きい「中通島」の南部・白魚（しろお）地区に所在する。

若者を育て、島の未来がどう変わるのかを考えた

長崎県立中五島高校は長崎県の離島、五島列島北部の通称「上五島」、新上五島町にある。新上五島町は、最近5年間の人口減少率が長崎県内で第1位、現在は約2万人の人口が2040年には8000人台にまで落ち込むと予測されている。

町には進学する生徒の多い上五島高校と、進学から就職まで幅広い、小規模校の中五島高校がある。

人口減少は、高校にとっても死活問題だ。生徒数や職員数が減ると、生徒の活動幅は狭まり、学校の活力も低下する。早急に有効打を放たなければ、町も学校も共倒れになるのは不可避といつてよい状況だった。しかし幸いにも、中五島高校と新上五島町役場には連携するきっかけがあった。

それは、2014年に同校の嶋藤慶太教授が進路指導主事の研修会で、筆者の講演を聞いたことに由来する。

「生徒と地域が関わることで、生徒も島も元気になるというイメージが浮かびました。島に戻ってから高校と地域が連携することでどんな若者が育ち、島の未来がどう変わるのかを考えました。そんなときに町の総合政策課の伊賀剛さんと知り合う機会があり、島の未来についてのイメージを鮮明に共有することができました」（嶋藤さん）

まもなく、中五島高校と新上五島町は組織として連携、双方で検討を進めた2015年度から2年生の授業（総合的な学習の時間）に町職員らが参加する形で、地域課題解決型学習を実施する運びとなった。

その後、この活動は「パブリックワーク」（以下、PW）と命名され、2014年4月入学生を「初代」、2015年4月入学生（現3年生）を「二代目」、そして2016年4月入学生（現2年生）を「三代目」と呼ぶようになった。

PWの仕組みはこうだ。まず、1年次に課題を設定し、グループをつくる。2年次に現地を調査し、それをまとめ、提言を行う。そして3年次に2年次で学んだことを地域に生かし、貢献するという具合だ。

PWは、生徒の進路選択にも影響した。

地域とともに学ぶ
6
高校連携で始まる
人材循環

地域の大人との交流により 自信と島を愛する心が向上

—中五島高等学校（長崎県）—

浦崎太郎 大正大学地域構想研究所 教授

教師と町職員が語り合い、鮮明なイメージを共有して始まった中五島高校の地域課題解決型学習「パブリックワーク」。過疎地や小規模校ならではのメリットを生かし、見立て通りに生徒が育っていく。キャリア教育で文部科学大臣表彰を受けた事例を紹介する。

写真提供 ● 長崎県立中五島高校

Taro Urasaki

1965年岐阜県生まれ。岐阜県内で高校教師として学校と地域の連携について実践的に研究。2017年4月より現職。地域創生学部で実習企画や学生指導を担いつつ、高校と地域が連携して人材育成と地元回帰を推進する仕組みの普及に尽力。文部科学省中央教育審議会学校地域協働部会専門委員を務めた。



1 中五島高校は西海（さいかい）国立公園内にある。2 いくつかの班に分かれて島の課題を出し合う。



3,4 無人島を活用した観光プランに取り組んだ二代目の観光班は、実際に島に渡って調査し、プランを考え出した。

た。同島の上五島高校は、2016年度に地域探究活動を導入することになった。

生徒が自分の言葉で発表
その成長ぶりに感慨を覚える

昨年11月11日には全校生徒、保護者、町職員ら多くの地元関係者を交え、「三代目PW」の全体発表会が開催された。

全5組が登壇し、そのうちの料理班は地元で伝わる彩り豊かな「かまぼこ」を取り上げた。めでたいときに家族そろって食べる伝統料理の「かまぼこ」を未来に伝えていこうと、学校に町の人々を招き、一緒に作って食べるイベントの成果を報告。

また、観光班は地元を訪れる大学生の声を参考に、島の豊かな自然を「インスタグラム（無料の写真・動画投稿のSNS）」で発信しやすいように、スマートフォンで

故郷に誇りを 持ってもらうために

伊賀 剛さん
新上五島町総合政策課

このパブリックワークで何より大切にすべき点は、体験によって地域の若者たちが自分が将来どこにいても、故郷に誇りを持って、地域とつながるきっかけを持てるようになっていくことです。誰かに頼んだり、任せたりするのではなく、一人ひとりが故郷に関わって取り組んでいくことが、愛郷心を育む道だということ。パブリックワークは、その具体的実践学習ではないかと改めて思いました。高校生が郷土のことを知り、考える機会に努めてきた結果、「第11回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」を受賞したことは、うれしく思います。

小さな活動が社会に 役立つことを実感

大久保智美さん
中五島高校教諭

高校生活で頑張ったことを挙げる生徒の多くは、パブリックワーク活動が進路選択につながったことを挙げていました。進路決定後の地域貢献活動では、準備段階から楽しんでいました。そこには、上五島のことを身近に感じ、自分たちができるとしたという姿勢がありました。そして、さまざまな場面で、地元の方々から感謝の言葉をもらったことが、生徒たちの貴重な糧になったと思います。自分たちの小さな活動が社会の役に立つということを実感できる経験でした。

地元の人の優しさと 温かみを感じた

竹内舞さん
長崎県立大学 看護栄養学部 栄養健康学科1年

パブリックワークを進めていく中で、上五島の歴史と現状を知ることができ、島のために何ができるかを考えるきっかけとなったと思います。また、インタビューの際に地域の人たちとコミュニケーションを図ることで、改めて地元の人の優しさと温かみを感じることができ、より島のことが大好きになりました。そして、この活動を通して学んできたことが自信となり、大学受験の際には自分の強みとして面接試験で生かすことができました。

新たな知恵を編み出していく。そして、人間関係の深さや、島への愛着心も醸成される。上五島の人々は島の未来を担う次世代に惜しみなく投資を行い、活動に関わった人が島の未来に光を感じ、喜びを共有し、次への意欲につながっていく。中五島高校のPW活動にはそんな好循環が形成されているといっても、決して過言ではないだろう。他方、この連携事業に危機がなかったわけではない。

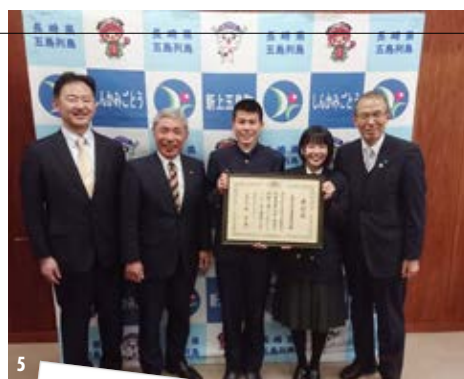
「今ではよかったですと思っていますが、当時は2年生の学年主任だけでは就きたくないと思っていました」と話すのは、三代目の生徒たちを熱心に率いてきた学年主任の田中孝征教諭だ。その理由として、教職員の間には未経験の指導に対する負担感や、部活動等との兼ね合いでのいら立ちが募っていたという。

このいら立ちが教職員間で徐々に増していくと、活動は往々にして骨抜きになり

「第11回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」を受賞した。この表彰は、キャリア

今回のポイント

- **小規模な学校から連携を始める**
大人との関わりを密にでき、生徒が確実に変容する。そこで経験を重ね、関係性を築き、十分なノウハウを共有できれば、規模の大きい進学校への波及も可能。
- **教職員が徹底的に議論する**
負担が増大する懸念性に対して、思いつくところを傾聴し合う場を設けることにより、納得感を高め、次に向けて意思統一を図ることができる。
- **担当部署が一同となって関わる**
必要時に部署で全員出動すればノウハウを共有でき、みんなが高校生との関わり方がうまくなるほか、担当者の異動によるリセットも回避できる。
- **未来をポジティブに語る**
地元の厳しい現実を突きつけ、不安の解消を迫るより、どんな未来を創り出していきたいかを考えさせた方が、高校生のモチベーションは高まる。



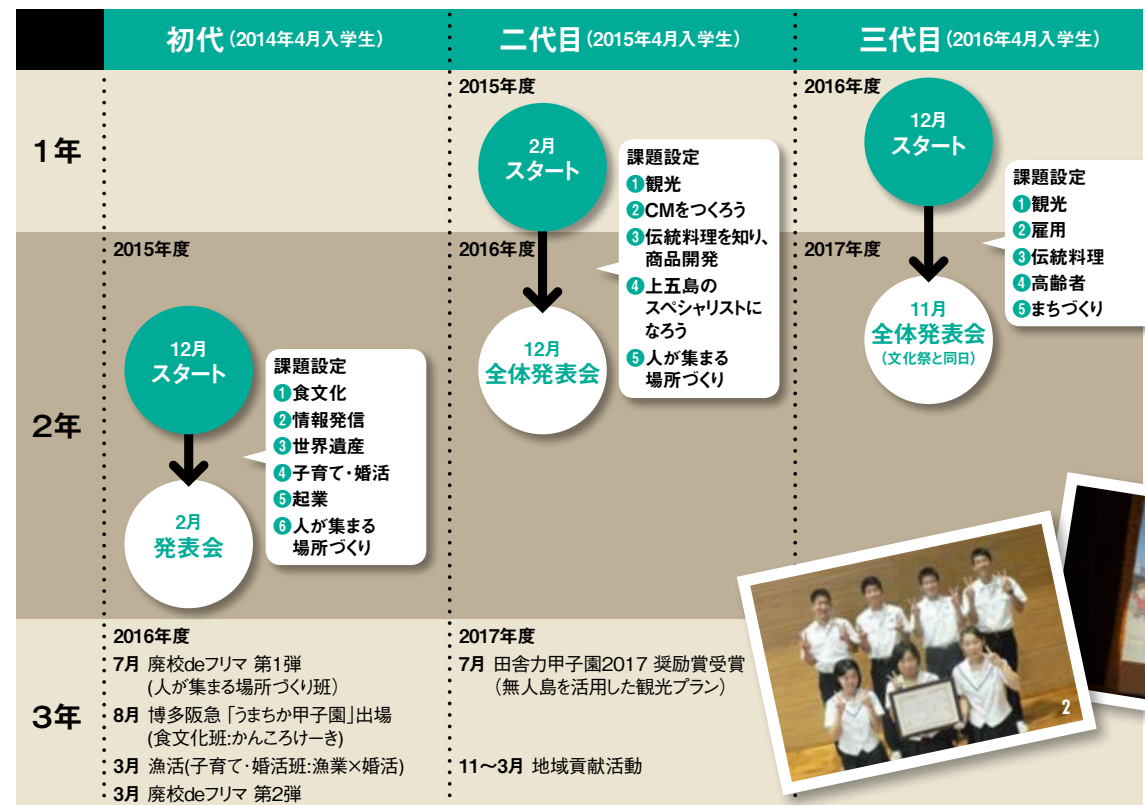
5 「第11回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」を受け、帰島後に江上悦生町長へ報告。6 QRコードを読み取ると観光地の映像が表れる観光マップは、町役場がポスター化し、島内各港に掲示されている。

ちだが、「どんな力を生徒につけたいかに焦点を当て、ほかに過度な影響が及ばないよう、改善策を全職員で納得のゆくまで話し合いました」と回避の理由について嶋藤さんは話す。

PWで町役場との連携を深めていったこと、校内の危機を克服したことも、島の将来を考え、育てるべき人物像に焦点を当てた丁寧な対話があったからこそのことだ。

教育の充実発展に尽力し、顕著な功績が認められた教育委員会や学校及びPTA団体等に対して、その功績をたたえ、文部科学大臣が表彰することで、キャリア教育の充実を促進することを目的としたもの。上五島は輝きを取り戻した」と語り継がれる日は、必ずや訪れるに相違ない。

中五島高校パブリックワークの変遷



初代は準備の都合により活動期間が3カ月と短かったが、町役場や地域の尽力で3年次に提案内容が実現した。二代目は約1年(2~12月)の時間をかけて活動し、コンテストで入賞する実力を身につけた。三代目も同様の時間をかけて活動し、どの班も立派な成果を収め、今後は提案内容の検証が予定されている。

1 三代目の観光班による全体発表会でのプレゼンの様子。2 無人島を活用した観光プランで「田舎力甲子園2017」に応募し、奨励賞を受賞した二代目観光班。

「一般に、地域課題解決型学習を導入しただけでは、ここまで顕著な教育成果を収めた例を聞いたことはない。では、中五島高校のPW活動には、一体どんな秘訣があったのだろうか。」

一つ目は時間の確保。三代目の生徒は、前年12月に二代目の発表会を聞いて以来、授業だけでも約20時間、夏休みなどを利用して取り組むべきテーマを考え、現場に足を運び、さまざまな調査を行いながら、地元の人々と交流し、解決策を考えてきた。

二つ目は地元の支援態勢だ。例えば、高齢者班には社会福祉協議会の職員、観光班には民宿経営者、料理班には食生活改善委

「中五島高校の活動には好循環が形成されている」

生徒5~6人につき、4~8人の大人がサポートすることで、生徒たちは活動を通して大人の呼吸を覚え、その経験を吸収し、

この学習活動を当初から育ててきた前出の嶋藤さんは、「高校入学後も自信を持って、他人とも話せなかった生徒がステージの上に立ち、自分の言葉で堂々と発表できるようになった成長ぶりに感慨を覚えました」と話す。

特に総合政策課は、同校の授業に課員が全員出動する力の入れようだ。この手厚い態勢について伊賀さんは、「生徒の成長が島の未来につながる手応えを共有でき、とても励みになっています。また、特定の担当者を充てるのに比べて相互研鑽ができ、人事異動でノウハウが断絶する心配もありません」と話す。

員会のメンバーという具合に、現場を熟知した専門家が授業内外でアドバイザーとして関わったほか、町役場の健康保険課や観光工課などの関係職員もサポーターとして加わっている。

3 民泊について訪問取材している三代目のまちづくり班。4 三代目の料理班は町民を学校に招いて「三世代交流かんぼこフェスタ」を開催した。

